JOURNAL OF KYOTO PRINTING INDUSTRY ASSOCIATION

VOL.668

京都府印刷工業組合

秋号
AUTUMN ISSUE

京印季報
Kyoinkiho

2024 AUTUMN

Special Contents:

秋季特別企画

シリーズ京の100年企業を訪れる
「株式会社からふね屋 堀尾武史代表取締役に聴く」

illustrated by Yudai

目次と巻頭言

2024 AUTUMN

1　巻頭言／副理事長　内藤　一徳
2　シリーズ 京の100年企業を訪れる「株式会社からふね屋 堀尾武史代表取締役に聴く」
6　2024全印工連フォーラムIN大阪開催
7　全印工連経営革新マーケティング委員会「中西印刷㈱への工場見学会開催」
7　～印刷感謝祭～ 本木祭開催
8　オフセット印刷学科講習開催
8　技能検定（オフセット印刷作業）実技試験実施
8　令和６年度前期 技能検定合格者発表（オフセット印刷作業）
9　京都府西脇知事への表敬訪問実施
9　京都市松井市長への表敬訪問実施
9　委員会だより／組織委員会
10　共済委員会
13　支部だより／中支部
下支部
14　会合だより／京都青年印刷人月曜会
京都印刷協和会
15　関連団体だより／京都府製本工業組合
15　７月・９月定例理事会開催概要
16　事務局からのお知らせ
16　よしみ散歩 ～印刷会館周辺地域のご紹介～
17　印刷会館利用状況
17　組合日誌
18　組合員異動
18　編集後記
18　表紙作画者紹介

https://kyoinko.jp/

秋の深まりとともに、心地よい季節が到来致しました。組合員の皆様には、日頃より京都府印刷工業組合の活動に対しご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。令和６年も後半となり、改めて一年を振り返るとともに、未来への展望を抱く時期となりました。

本年も印刷業界は、さらなる変化と挑戦の年でありました。デジタル化の急速な進展、そしてコロナ禍以降の多様化による業務形態の変容は、私たち印刷業者に新たな挑戦をもたらしています。しかし、紙媒体が持つ「質感」や「視覚的な深み」、そして「手に触れる喜び」は、今なお人々に強い印象を与え、デジタルにはない価値を提供し続けています。

特に京都では、歴史と文化に根ざした伝統工芸の一環として、印刷業が果たす役割は重要です。これからも、私たちの業界はこの誇り高い伝統を守りつつ、新たな技術との融合を進めていくことが使命であると強く感じております。また、環境に配慮した印刷技術の導入や、持続可能なビジネスのあり方についても、今後ますます重要性が増してくることでしょう。

この秋、実りの時期を迎え、私たちも新たな挑戦と発展の実を結ぶべく、努力を続けてまいります。京都府印刷工業組合は、これからも組合員の皆様と共に、業界の発展と地域社会への貢献に邁進していく所存です。

結びに、組合員の皆様のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げ、巻頭言とさせて頂きます。

京都府印刷工業組合
副理事長　内藤　一徳

2024

秋季
特別企画

Autumn

シリーズ
京の100年企業を訪れる

堀尾武史代表取締役

SPECIAL
INTERVIEW

「株式会社からふね屋 堀尾武史代表取締役に聴く」

～お客様のニーズを掴み、協力会社との連携によるワンストップ対応～

100年を超えて経営を続けておられる組合員事業所様を訪問し、その歴史と魅力をシリーズで紹介する企画「シリーズ 京の100年企業を訪れる」。第18回目の今回は、各種印刷物はじめグラフィックデザイン・ＤＴＰ、自費出版、ホームページ・オンラインショップ制作等、お客様の様々なニーズに対して協力工場と連携・ワンストップ対応されている「からふね屋」様を取材させて頂きました。

大正10年、「唐舟屋印刷所」として創業時のメインのお客様は出版関係、書籍関係でしたが、高度成長期は和装関係、着物呉服関係に広がり、最近はホームページ・オンラインショップ制作や自費出版を含めた美術芸術書籍の制作にも注力されています。創業者はじめ歴代の代表者は皆、積極的に地域との交流に勤しまれ、時代背景に柔軟に対応して業態変革を重ねてこられたその経営手法には、多くの組合員の皆様に参考にして頂けるのではないかと思います。是非ご一読ください。

夢二木版画「唐船や」
版元：湊屋

昭和42年当時の現事務所の建設風景

■からふね屋様の会社概要をご紹介下さい。

大正10年創業、戦後の昭和28年に株式会社としてスタートし、今年創業103年を迎えました。

現在の事業内容は、印刷の分野ではカタログ、書籍、パンフレット等の頁物冊子をはじめ、各種案内状やリーフレット、フライヤー・チラシ、ポスター等の制作を、協力工場と連携して対応しています。

また、印刷のお得意先を中心に、ＷｅｂサイトやＥＣサイトの制作管理もしています。印刷とＷｅｂのワンストップサービスでお客様の利便性を高めています。

もう一つの柱にしようとしているのが、京都の伝統工芸美術作品をオンラインで海外に販売する越境ＥＣ「Kogei Art KYOTO」です。昨年、事業再構築の補助金を活用して立ち上げ、軌道に乗せるために奮闘しているところです。

会社は４名体制。経理は役員でもある私の妹が務め、営業は私を含めて２名、ＤＴＰスタッフが１名です。

■社長様は４代目ですね。

初代つまり創業者が私の祖父、堀尾幸太郎です。２代目が私の伯父の貞太郎、そして３代目が父の五郎。４代目の私もバトンを受けて23年が経ちました。

私は大学卒業後、２代目貞太郎の妻の実家が経営する四日市印刷工業㈱という歴史のある会社に入りました。社長宅に住み込みで修行させて頂き、２年半位経った頃「そろそろ帰って来い」と言われ、昭和61年に当社に入社しました。

■創業の頃のことを教えて下さい。

江戸時代の頃、堀尾家は先斗町で鳥屋とともに不動産経営をしていたようです。先斗町の歌舞練場の地を、明治28年に私の曾祖父が譲渡したという記録が残っています。その頃は代々が、鳥屋三四郎という名前を継承して営んでいましたが、祖父 幸太郎が婿養子になり創業したのが「唐舟屋印刷所」です。

当時、出版社の仕事を多数受けていて、大正時代から昭和初期の、いわゆる文化人との交流が盛んでした。竹下夢二もその中の１人だったと聞いています。

「からふね屋」という名前の由来は、その竹久夢二の絵に描かれていた屋号から頂いたと伝え聞いています。また創業当時から使われている弊社の「船マーク」も夢二のデザインである可能性が高いとご指摘頂いています。

祖父が事業を始めたのは23歳位でした。その頃の印刷業は、今のＩＴビジネスのような先端産業だったと思います。創業当時、事務所は先斗町の三条(今の歌舞練場)にありました。昭和５年に今の場所に営業所を移転しました。

昭和２年(1927年)の「営業のしおり」が残っています。当時の印刷工場の活字の紹介や見本帖のようなものです。これによると、昭和２年の営業所は京都市先斗町三条南入、工場は京都市東山線仁王門南だったことがわかります。業務内容も、邦文活版印刷、欧文活版印刷、石版印刷、オフセット印刷、写真製版(外注だったと思います)などが書かれています。また、各種文案の代作や意匠図案の制作もできると紹介しています。

■その後の沿革について教えて下さい。

創業者の幸太郎は昭和33年に急逝しましたが、既に跡取りの兄弟４人が仕事に携わっていたのでそのまま引き継ぐ形になり、長男の貞太郎が２代目の社長となりました。

貞太郎は１回出征していますが、戦中から既に仕事をしていました。戦中に当社は河北印刷さんと企業合併になり、貞太郎が工場長をしていたと聞いています。戦後に河北さんから離れて「からふね屋印刷所」を再開した頃から兄弟4人で商売するようになりました。

貞太郎も積極的に地域のお手伝いに関与し、満足稲荷神社の氏子総代、疎水・白川を美しくする会、民生委員などに携わりました。印刷組合でも長年役員をしていました。

次男の勝が工場長、三男の史郎と四男の五郎が営業を担当しました。役割分担がしっかりとできていたようです。

創業の頃は書籍関係の仕事が多かったようですが、昭和30年代の高度成長期頃に和装関係、着物呉服関係の案内状等の仕事が増えました。

主流は和紙とシルクスクリーンを組み合わせたものでした。文字は活字だけでなく、書き文字で印刷したものもあります。Ａ３の手漉きの和紙に季節に合った和柄を印刷した見本を作り、小売店に提案営業していました。

社内で考えた企画をデザイナーに図案注文します。友禅における捺染の技術と一緒で、図案を版にしてくれる方がおられ、協力会社のシルク印刷工場に印刷をお願いします。昭和40年代から50年代にかけては、「いいもの」、「美しい印刷」、「凝った印刷」をテーマに商売してきました。

営業のしおり

呉服屋さんの案内状

東寺 御詠歌和讃集
右：昭和26年発行（印刷者：堀尾幸太郎）
左：昭和46年発行（印刷者：堀尾貞太郎）

■３代目は社長のお父様ですね。

父が３代目の社長になったのは平成９年ですが、平成の始めに現在の社屋に改築した頃から徐々に仕事を引き継いでいたので、実質的に経営に携わっていたのは10数年位でした。

父の時代はバブルのはじけた頃で舵取りが大変だったと思います。業態を拡大させるのではなく、4代目の私がやりやすいように事業を見直してくれたように思います。

そして平成13年、父が急逝しました。急ではありましたが、専務として既に経営に近いポジションにいたので、なんとかバトンタッチの形は取ることができました。

■４代目を継承してから、からふね屋様はどのように展開されているのですか？

私が会社に入ったのは昭和61年ですが、その頃は活版印刷の鋳造から文選、植字、印刷まで工場はフルライン稼働していました。印刷機はオランダ製の菊全単色機、ハイデルのKSBやプラテンなど６、７台保有していて、オペレーター、文選植字担当、鋳造担当など10人以上の人がいました。

その後、活版印刷工場は徐々に縮小して最終的に閉め、新しい業態に替えて行きました。今は工場を持たず、プリプレスおよび営業主体の印刷業になりました。

活版印刷のフルラインを保有してる頃から、シルクスクリーンなど様々な要素と組み合わせて印刷物を仕上げて納品していたので、そのノウハウを継承しながら、デザイン的、企画的な面を含めて営業力を強化してきました。1990年代からはマックを取り入れ、社内でＤＴＰ作業が出来る体制を取っています。

■これまで経営危機のようなものはありませんでしたか？

何回もあったと思います(笑)。平成バブルがはじけてからずっと不景気ですが、知恵を絞って様々なことに挑戦しながらここまで生き延びてきたというイメージです。

今一番痛いのは和紙メーカーさんや協力工場さんの廃業です。お客様から「前回の商品をもう１度作って欲しい」と言われても、廃業されていては作れない。だからといってコンピュータを使ったプロダクトは横一線になるのでクオリティに差がつかない。今は紙を使った印刷業が非常に困難な時代です。

今後は紙に取って代わりつつあるデジタルの分野が非常に重要だと思います。当社がＷｅｂの仕事に取り組むことになったきっかけは、お客様から「ホームページを作るから印刷のデータが欲しい」と言われたことです。Ｗｅｂもできればワンストップで対応できるので、お客様も離れないだろうと考えました。今は上位のお得意様のホームページはほとんど当社が制作・管理しています。

■創業100年続く老舗として感じておられるメリットやデメリットはありますか？

老舗で良かったと思うのは、お付き合いが広がる点です。京都経済同友会や京都ライオンズクラブでも、周りは数百年続く会社などたくさんいらっしゃいますが、曲がりなりにも100年続いている印刷会社として老舗のイメージを持ってもらえる。京都では100年企業はまだまだ“ひよっこ”ですが、バックボーンとして歴史が役立っていると思います。

デメリットは、過去の負債や“しがらみ”を一緒に引き継がなければいけないこと。いいことがあれば、必ずマイナス面も一緒についてくるものと感じています。

■103年と永く続いてきた秘訣は何でしょうか？

歴代の経営者が皆、事業拡大志向の人間ではなかった。頂いた仕事を丁寧に仕上げ、自分達と社員が不自由なく暮らせればよいという考えが、結果的に永く続くことに繋がったと思います。

もう一つはネットワークと人の繋がりです。創業者、そして２代目を含めた４兄弟、それぞれが周りの人と触れ合い、関りを持っていたからこそ事業が継続できたと思っています。

当社は印刷機を保有していませんが、製造に関する協力会社をはじめ、ライターやデザイナーとの緊密なネットワークを築けたことが大きな強みとなっています。ＥＣサイトやホームページ制作についても、これまでの印刷事業を通してお付き合いのあったカメラマンやクリエイターとのネットワークがあったからこそ実現できました。

お客様との繋がりも大事です。中には創業の頃からお世話になっている会社もあり本当にありがたい。お客様を大切にし、長く取引ができることも、会社の継続には必要な要素かもしれません。

■家訓や経営理念といった代々伝わっているものはありますか？

言葉として残っている家訓はありませんが、伝わっているのは「美しい印刷」という一言です。極端に言えば、採算を意識せず、とにかく「いいもの」を作ろうという考えです。お客様を「う～ん」と唸らせるくらい、いいものをつくらないと面白くない。

ホームページに載せている「印刷の悉皆屋」というコ

GALLERY & SHOP 唐船屋

本社外観

ンセプトは私が考えました。私が入社するまでは、自社の会社案内的なものを作ったことがなかったので、社長になりホームページを開設した時に考えました。

創業当初は「印刷所」が社名に入っていましたが、60年以上「からふね屋」だけの屋号です。しかし、今も「からふね屋印刷」と言われることがあります。今の屋号であれば特に印刷に捉われることはないかもしれませんが、印刷を媒介として、お客様の役に立つ仕事をすることが創業からのコンセプトだったので、大事にしていきたいと考えています。

■１階でお店を展開されているのですね。

１階は「GALLERY & SHOP 唐船屋」です。オープンは11年前、当社の最後の活版印刷機を手放す時でした。次第に手がける仕事がデジタル化されたものばかりになり、これまで当社が積み上げてきたことを残したいと思いました。

そこで、和紙や活版印刷機、シルクスクリーンの技術を生かし、京都のうちわ屋さんや扇子屋さんにお願いしてオリジナルグッズを作ったり、全国の和紙メーカーさんが開発されたプロダクトを仕入れ、印刷と紙にまつわるセレクトショップを作りました。宣伝の意味合いが強いのですが、中には別注品の注文を頂いたりコラボにまで発展することもあり、当社のマーケティングの役割を果たしています。

今は一旦休載していますが、当社のホームページで「京都仁王門上ル下ル」というブログを連載しています。最近、近くの仁王門通りに飲食店など新しい店が増えてきて活気が出てきました。これは嬉しいなと思い、もっと盛り上がるようにと、お店や人を取材してウェブマガジンという形で発信しています。生まれ育ったこの場所を大事にしながら仕事を続けていきたいと思っています。

■これからのからふね屋様はどのような方向に進もうとされていますか？

最近、自費出版のお手伝いをさせて頂くことが増えました。多いのは墨彩や水彩画などのアート作品集や美術工芸関係の図録作りです。また、お香で有名な会社が設立80周年記念に作られた書籍をデザイナーと組んで３年がかりで作ったこともあります。

このような本の場合、写真撮影の手配から、レイアウト、紙の選択などまでアドバイスをさせてもらい、補正を含めてプリプレス的なことも社内で行います。手間がかかるだけに出来上がりに感動があります。印刷で一番取り組みたいのは、自費出版を含めた美術芸術関係の書籍の仕事です。

また、今力を入れているのは、最初にもお話した「Kogei Art KYOTO」という伝統工芸品の越境ＥＣ事業です。

伝統工芸品は、ものづくりとして大変面白い。十数代と続いてきた技術とその手法を、機械に頼らず自分の手だけで再現する素晴らしい技です。特に京都の伝統工芸は日本でもトップクラスの作品が多いのですが、現役世代の方は、後継者やお弟子さんが１本立ちした頃、日本の市場が縮小しているかもしれないと危機感を抱いています。そのため、海外市場の開拓について強く意識されており、私がこの事業を提案したとき、彼らは共感して協力して下さりました。継承の必要な伝統工芸にとって、海外販路は避けて通れないことだと感じています。壁は高いけれど、モノにできるよう頑張っていきます。

KogeiArtKYOTO
https://kogeiart.kyoto.jp/

貴重なお話を聞かせて頂きありがとうございました。

（文責：編集委員会）

株式会社からふね屋　会社概要

創　　業	大正10年（1921年）
代 表 者	堀尾　武史（代表取締役）
本　　社	〒606-8345 京都市左京区東大路通仁王門下ル
電　　話	075-761-1166
事業内容	各種印刷物（オフセット印刷、シール印刷、スクリーン印刷、デジタル印刷）／グラフィックデザイン・DTP／自費出版（私家版）／ホームページ・オンラインショップ制作／オリジナル扇子・うちわ制作／電子ブック・電子カタログ制作／撮影コーディネイト／テキストコンテンツ制作 等